

〔史料紹介〕 神奈川県立歴史博物館蔵「岡田鴨里関連文書」について

石 濱 裕美子

神奈川県立歴史博物館に所蔵される「岡田鴨里関連文書」は、淡路の漢学者岡田鴨里（一八〇六―一八〇）

の嫡孫真（一八四六―七六）、養子文平（一八六〇―一九〇〇）、義曾孫秀夫（一八八四―一九二三）という鴨里の血筋・学統をついだ四代の著作・関係文書七〇二件八一二点から構成される。岡田鴨里は幕末の志士や阿波徳島の近現代史に多大な影響を与えた人物であるため、本資料は幕末・維新期の思想・政治史、近世淡路史の解明に資する貴重な一次史料と言える。筆者は二〇一五年八月に神奈川県立歴史博物館において本資料群を発見し、二〇一六年二月にデジタル化を完了した。これを奇貨としてここに本資料の著者、内容、資料としての価値などについて紹介したいと思う。

一、岡田鴨里とその時代

岡田鴨里は諱を僑、字を周輔とし、一八〇六（文化三）年に、徳島藩の治める淡路島の王子村（現淡路市）の庄屋砂川佐一郎の四男に生まれ、掃守村（南あわじ市）の豪商岡田家に養子に入った^①。鴨里の号は掃守（かもり）村の名にちなんだもので、蔵書印は「吾耻堂蔵書印」である。二二才の一八二八（文政一一）年に京都に出て最晩年の頼山陽に師事し、山陽の死後、その主著である『日本外史』を書き継ぎ、二〇年後に完成した『日本外史補』一四巻を、一八五〇（嘉永三）年に安中藩の板倉甘雨（一八〇九―一八五七）に献じた。一八六一（文久元）年九月、徳島藩主により中小姓格にとりたてられ、洲本学問処の御儒者と

なった。^②

鴨里が「五倫の説」(未刊)を記した一八六三(文久三)年、次女の婿である津井村庄屋古東領左衛門(一八一九—一八六四)は藤本鉄石、松本奎堂らとともに天誅組の大和拳兵に参画し、獄死した。勤王の志士である頼山陽の息子の頼三樹三郎(一八二五—五九)や森田節斎(一八一—一六八)と深く交わっていたこと、木戸孝允(一八三三—一八七七)の蔵書にも鴨里の代表作である『日本外史補』と同書の「列伝」にあたる『名節録』三巻が含まれていることなどから、鴨里の著書や存在が幕末の歴史や志士の思想に直接・間接に影響を与えていたことは明白であろう。幕府瓦解直前の一八六六(慶應二)年、鴨里は「吾耻四山十围喬人」の筆名で幕末日本外交の裏面史『草莽私記』五卷(未刊)を著した。

維新後一八六八(明治元)年閏四月、徳島藩の参政に任ぜられ、一八六九(明治二)年正月には参政、学校懸准物頭席に任ぜられた。この同年、淡路において版籍奉還にとりもなう禄制改革が行われると、徳島藩の城代家老であり淡路に一万石の領地をもつ稲田家は、家臣の身分が卒族となり困窮することを防ぐため、徳島藩からの分藩独立を画策した。洲本の徳島藩士は激怒し、鴨里は平和裡に事態を收拾しようとしたものの果たせず、嫡孫岡田真も大村純安

とともに檄文を書き、ついに一八七〇(明治三)年六月一日、徳島藩士は稲田の学問処である益習館をはじめとする稲田方の屋敷を急襲した。いわゆる庚午事変(稲田騒動)である。稲田側は目立った抵抗は行わず自刃二名、即死一五名の犠牲者をだし、事変後、襲撃側の徳島藩士たちも切腹・流罪などの処罰を受けた(洲本市史編纂委員会、六四八—七三五)。

この後、稲田の家臣団は北海道開拓命令により静内に移住し、淡路島は徳島県から切り離され兵庫県へ編入された。庚午事変は淡路と徳島が分断する契機となったのである。

鴨里は一八七二(明治五)年一〇月、徳島藩主蜂須賀家の歴史を編年体にとめた『蜂須賀家記』を上梓し、藩への最後の奉公を終え、一八七八(明治一)年九月に掃守村に帰り、一八八〇(明治一三)年九月五日に舌がん死去した。享年七五才。遺体は掃守の木戸市池上山に葬られた。一九一五(大正四)年十一月一日の大正天皇即位にあたっては従五位を追贈されている。以上に見るように岡田鴨里は幕末の思想、歴史の解明に資する著作を多数なしたばかりでなく、鴨里自身が幕末から明治にかけての徳島・淡路の変動する政治シーンにおいて重要な役割を果たしていた。

鴨里の文書は家督をついだもののいづれも夭折した嫡孫真、養子文平、義曾孫秀夫の三代にわたって受け継がれ、その中で彼ら自身の著作・関連文書も加えられていった。次節においてこれらの文書に基づいて、真、文平、秀夫三代の年譜を述べる。

二、鴨里の学統をついだ真、文平、秀夫三代

鴨里の最初の妻は伊加利村庄屋仲野孫右衛門（正雄）の娘コウであり、正雄の母綱子が岡田家の出身である。コウの死後、地頭方村庄屋榎本佐兵衛の姉マキを後妻にとり、この二人から三人の娘が生まれた。長女のスマは慶野村庄屋の三男与左衛門（与一郎）を養子に迎えて岡田家を嗣ぎ、次女カツは後年天誅組の変に連座した津井村の庄屋古東領左衛門に嫁ぎ、三女ヤスは鴨里の実家の砂川佐一郎（恒雄）に嫁いだ。

与一郎は隠居し、家督は嫡孫の真にうつったものの（岡田真墓誌）、真は三〇才で夭折し、真の娘のアイが一八七八（明治一一）年に幡多村の秦幸左衛門（孝平）の三男文平を養子に迎えた。しかし、アイは二五才でなくなり、文平は古東領左衛門の孫であり鴨里の血をひくナカを一八九九（明治三二）年に後妻に迎えた。文平は帝大を卒業するな

ど優秀であったものの病がちで、ナカを後妻に迎えた翌年の一九〇〇（明治三三）年に四〇才で他界した。

この間、岡田家の家産は真の系列から離れ、真の異母弟和三郎にうつったものと思われる。なぜなら、岡田家の菩提寺栄福寺（南あわじ市榎列掃守）の過去帳によると、岡田家の戸主は、十世平兵衛、十一世与一郎（養子）、十二世和三郎、十三世秀夫と継承されており、鴨里の長女スマと養子与一郎の間に生まれた真、真の妻セシ、養子文平の名も見えないからである。過去帳には鴨里の先妻は「岡田家十世平兵衛の妻コウ」、与一郎の後妻が「十世平兵衛の長女サキ」とあり、前述したようにコウは岡田家の血を引く祖母を持つため、岡田平兵衛の血をくむ娘を娶り、その婚姻によって男児をなした与一郎が岡田の「戸主」となったと思われる。筆者が入手した最古の戸籍は文平を戸主とし、鴨里を前戸主と記していること、鴨里、後妻マキ、真、文平、文平の家族の墓は岡田家の墓地とは別に掃守村を見下ろす木戸市池上の山上に並んでたつことなどから、鴨里の学統を継いだ者（真、文平）と、岡田家の家産を継いだ者（与一郎、和三郎、秀夫）とは明かに別戸を形成していたと思われる⁵。しかし、平兵衛の末裔と鴨里の末裔は争っていたわけではなく、前者が後者の血筋を積極的に求めていたことは、和三郎の弟又五郎が古東家に養子に入り

鴨里の曾孫カメの夫となったこと、その結婚によって生まれた静子を和三郎の子秀夫が娶っていることなどから知ることができる。

秀夫は岡田の当主である十世平兵衛の血筋に連なり、かつ、鴨里の血をひく静子を娶り、さらに漢学者であったため、両家に橋を架ける存在であった。しかし秀夫は父和三郎の家産をついだ翌年、四〇才の若さで北京で客死した。学者として名が知られる岡田家の関係者はみな不思議に夭折である。秀夫の逝去当時、長男の健は一〇才、妻の静子は三三才であった。岡田鴨里関連文書はこの秀夫の妻、静子の手によって護られていたもので、一九六八年に静子と長男健によって神奈川県立歴史博物館に寄託された。以下に、岡田家三代の年譜をあげる。

二一 岡田真（一八四六—七六）年譜

真は字は真太郎とし、^{きょう}顥翁と号した。岡田真の年譜は主として墓誌に基づき、岡田鴨里関連文書 No.763 の「岡田真履歴書」により補訂した。

一八四六（弘化三）年 鴨里の長女スマと養子与一郎の長男として生まれる。

一八六五（慶應元）年 豊後に遊学する（No.763）。

〔史料紹介〕 神奈川県立歴史博物館蔵「岡田鴨里関連文書」について

一八六八（明治元）年 洲本文学教授となる。

一八六九（明治二）年 命を受け長崎・薩摩を探索する（No.763）。

一八七〇（明治三）年 庚午事変に際し大村純安とともに檄文を記す（洲本市史編纂委員会・六八四—六八五）。後、東京に遊学する（No.763）。

一八七一（明治四）年八月 徳島県の権大属に任ぜられる。

一八七二（明治五）年九月 名東県の権典事に任ぜられる。

一八七三（明治六）年八月 県制改革で権大属に転じた後に辞職し、東京に遊学する。

一八七六（明治九）年十一月 東京において客死。翌年海禅寺に葬られる。享年三〇才。

一八八一（明治一四）年十二月一〇日 掃守の木戸市池上山に葬られる。

二二 岡田文平（一八六〇—一九〇〇）年譜

文平は岡田家から古東家に養子に入った古東又五郎とともに奥井寒泉（一八二六—八六）門下の双壁と謳われた（片山嘉一郎・四七三）。奥井寒泉は藤森弘庵（一七九九—一八六二）門下の淡路の朱子学者であり、父の奥井中

里（一七八四—一八四六）は山陽の親友にして益習館の儒者であった篠崎小竹（一七八一—一八五二）の親友であった。岡田文平の年譜は岡田鴨里関連文書No.764の『岡田文平履歷書 二点』に基づいて作成した。

一八六〇（万延元）年 二月三日 幡多村の庄屋秦幸左衛門（孝平）の三男に生まれる。

一八七五（明治八）年六月 淡路国洲本師範学校に入学する。

一八七七（明治一〇）年一〇月 洲本師範学校が神戸師範学校に合併したため神戸師範学校に入学する。

一八七八（明治一一）年九月 神戸師範学校を退学する。
一〇月 京都府において小学訓導に奉職する。

一八八〇（明治一二）年七月 鴨里の死を受けて帰郷する。九月、奥井庄一（寒泉）のもとで漢学を修める。

一八八三（明治一六）年九月 帝国文科大学（現東京大学）古典講習科漢書課乙部に入学する。

一八八七（明治二〇）年七月 同課を卒業する。

一八八八（明治二一）年一月 東京市ヶ谷都立成城学校教員に勤務する。二月 成城学校教員を辞職、一二月第二高等中学校助教諭。漢文学と国文学の教授を兼任する。

一八九〇（明治二三）年一〇月 第二高等中学校助教諭に任ぜられる。

一八九一（明治二四）年六月 教授に昇任する。

一八九七（明治三〇）年七月 病により辞職する。

一九〇〇（明治三三）年 死去。掃守の木戸市池上山に葬られる。

二二三 岡田秀夫（一八八四—一九三三）の年譜

岡田秀夫の履歴は秀夫の葬儀の際の記録「岡田秀夫葬儀諸控帳」に基づく。

一八八四（明治一七）年 岡田和三郎・フジ（一八五七—一九三一）の子に生まれる。

一九一〇（明治四三）年 東京帝国大学文科（漢文学・文法を専攻）を卒業する。

一九二四（大正三）年九月 札幌帝国農科大学（現北海道大学）の講師に任ぜられる。

一九二六（大正五）年一二月 広島高等師範学校（現広島大学）の講師に任ぜられる。

一九二八（大正七）年四月 教授に昇進する。

一九二二（大正一一）年三月 父和三郎の死亡に伴い家督を相続する。

一九二三（大正一二）年八月二七日 支那文学研究のため

帝国学士院の在外研究員として北京に留学する。

同年一〇月二日 北京にて大腸カタルに倒れ、同月二〇日午後二時、日華同仁病院において永眠する。

三、「岡田鴨里関連文書」発見の経緯

三―一 秀夫死去時の淡路人脈

筆者の祖母イマは真の娘、つまり鴨里の曾孫である。イマは一八七四（明治七）年に生まれ一八九四（明治二七）年に石濱鐵郎に嫁いだ。江戸時代石濱の当主は代々徳右衛門号を名乗っており、鐵郎の祖父も徳右衛門名で戸籍に記録されている。石濱徳右衛門の名は砂川家文書の一八〇九（文化六）年九月、一八二五（文政八）年九月、一八三六（天保七）年八月の書簡に「津名郡御郡代様御手代」の肩書きで見え、一八四九（嘉永二）年一〇月一〇日、安政年間三月二〇日の書簡にも徳右衛門の名前が確認できる。⁸また、一八八三（嘉永六）年の洲本の武士の役付きを示す文書では石濱徳右衛門は町手代の身分であることから（洲本市史編纂委員会…一四九）、徳右衛門は淡路の奉行所勤めであったことが分かる。石濱家の家系図は昭和二〇年の東京空襲で消失しているものの、家伝によると蜂須賀家の

家臣であり禄制改革の際にぎりぎり士族に入る身分であったという。小奉行は禄制改革の際、九等士族という最下位の士族に転じたので、家伝は古文書の内容と一致する。鐵郎は慶應義塾をでて時事新報社・報知新聞社などにつとめた新聞人であった。¹⁰

祖母のイマは教育熱心であり鐵郎に東京進出を強く勧め、四人の息子を三人まで東京帝大、一人を法政大に入れた。長子の九州大学教授石濱知行（一八九五―一九五〇）は同郷の東京大学経済学部教授の大内兵衛（一八八八―一九八〇）¹¹とともに労農派のマルクス経済学者として知られ、次男の石濱金作（一八九九―一九六八）は一高時代から同期の川端康成とともに新感覚派を開いた小説家である。筆者はイマの四男秀雄の子である。

一九二三（大正一二）年に逝去した秀夫の葬儀控帳「岡田秀夫葬儀諸控帳」（岡田鴨里関連文書Z-160）から、秀夫死去時の岡田家の内外の交友状況を知ることができる。死亡通知の送り先には岡田文平の息子岡田有年、大内兵衛の兄である大内宗次郎、淡路出身で東洋学のパイオニアとして知られる関西大学教授石濱純太郎（一八八八―一九六八）、古東家当主である章、岡田家から古東家に養子に入った古東又五郎、筆者の祖父である石濱鐵郎など淡路の名士の名が見える。

本葬の日、喪主は一〇才の長男健がつとめ、以下、前火、花車、生花、花輪、蓮花、幡、花籠、灯籠、洒水、燭台、香炉…など葬儀の役割分担が記される中、石濱鐵郎は蓮花を担当している。親戚代表は古東家に養子に入った秀夫の実の叔父、古東又五郎がつとめている。ちなみに、石濱純太郎は三圓、石濱鐵郎は五圓、大内宗次郎・兵衛兄弟はそれぞれ一圓の小為替を包んでいる。

岡田鴨里関連文書No.765によると、真の妻センは東京の石濱鐵郎の家で一九〇四（明治三七）年に急逝したことが記されており、鐵郎の本籍も一九一六（大正五）年から淡路から東京赤坂丹後町に移していることから、鐵郎・イマの生活の拠点は遅くとも明治末年には東京に移っていたことが知れる。東京に移動した石濱家と淡路の関係は細り、イマの孫の代は淡路の岡田家とは完全に没交渉であった。したがって、筆者が秀夫の家系に伝えられていた岡田家四代の文書について知るよしもなかった。

三二二 岡田鴨里文書発見の経緯

二〇一三年十一月九日、高松歴史資料館で開催された「知の巨人 藤澤東岐展〜没後一五〇年記念〜」のオープニングの席に、筆者が藤澤家と姻戚関係にあった石濱純太郎¹²の関係者として参列した際、四国の儒者ネットワークを

研究テーマとする太田剛四国大学教授の知遇をえた。このご縁により、二〇一四年三月二四日、太田教授のご案内で鴨里の筆になる稲田家の顕彰碑のたつ洲本の江国寺、「岡田鴨里先生誕生之宅址」の碑文がたつ王子村の鴨里の生家、掃守村の鴨里の旧宅跡などを回り、鴨里の墓（土葬）を管理し岡田家の菩提寺となっている栄福寺に詣でた。その際栄福寺の住職岡崎正信師より、鴨里の旧宅跡にたつ頌徳碑は一九五八年に住職の祖父岡崎密乗師が作文したものであること、現在の岡田家の当主は秀夫の孫、岡田至氏であること、至氏が鴨里に關係した資料群を関東の博物館に寄贈したことなどをご教示戴いた。そこで岡田至氏に連絡したところ、その博物館とは神奈川県立歴史博物館であることを知った。

二〇一五年八月一九日、筆者は神奈川県立博物館において、金庫を改造した収蔵庫に収められていた七〇二件八一二点の「岡田鴨里関連文書」を初見した¹³。資料が博物館に入った経緯について同博物館の学芸員古宮雅明氏と岡田至氏から聞き取った話を総合すると以下のようになる。

岡田秀夫の死後、妻の静子は実家の古東家において古東家の当主である弟章と暮らしていた。しかし、淡路をでて息子¹⁴の順をたよることとなり、一九六八（昭和四三）年に鴨里関係文書も関東に持ち出され、秀夫の長男健によって

開館したばかりの神奈川県立歴史博物館に寄託された。その後四一年たった二〇〇九（平成二一）年一〇月七日、健の長男である至氏が文書を正式に博物館に寄贈した。

鴨里の文書は岡田家の側ですでに整理・分類（A～K）・目録化されており（岡田静子 一九六八）、この目録の冒頭には鴨里から秀夫の玄孫にいたるまでの家系図が附されている。そこに記される岡田家の戸主継承の流れは栄福寺の過去帳の記述と一致する。

博物館側はこの目録と現物資料を照らし合わせて通し番号と枝番をふり、資料に防虫処理を施した。本稿の末尾に附した目録は岡田家がつけた資料のタイトルに博物館が附した通し番号を対照させたものである。また、目録の後に附した家系図は、この岡田家提出の家系図、栄福寺の過去帳、筆者の入手した戸籍の情報を総合して作成したものである。

博物館の性格上、資料の閲覧には制限が伴うため、岡田鴨里関連文書が寄託・寄贈されたいずれの時にも博物館の年報にはその事実が掲載されることはなく、結果として本文書の存在はこれまで誰にも知られることはなかった。この状況を打開すべく筆者は博物館の許可をいただき文書のデジタル化に着手し、作業は二〇一六年二月二三日に完了した¹⁴。撮影実務ならびにデータ整理は早稲田大学・教育・

総合科学学術院の奥山舜一郎が中心となって行った。

四、文書の内容ならびに史料的价值

岡田鴨里関連文書は岡田家によってAからKまでの記号によって分類されており、大まかに言えばAからFは岡田鴨里の著書の原本と執筆時の資料、Gは岡田真関係、Hは岡田文平関係、Iは岡田秀夫関係の同様の資料である。

Aは『蜂須賀家記』の自筆原本と草稿、ならびに執筆にあたって使用した資料類から構成される。『蜂須賀家記』は徳島藩主蜂須賀家の編年的な歴史書であり、蜂須賀家の歴史の解明に有用である。

Bは『日本外史補』（以下『外史補』）の自筆原本と自筆の資料、Cは『外史補』の原本・草稿、並びに執筆時資料として用いた各地で書写・収集した諸書・系図・資料の抜き書き等である。『外史補』は鴨里の主著でありDに含まれる『名節録』(No.270—272)とともに、維新思想史の解明にとって重要な歴史的価値をもつ。

頼山陽の『日本外史』（以下『外史』）は源氏・平氏から徳川氏にいたる武家の盛衰を朱子学的な大義名分論すなわち、大義名分を護つたものを褒め、乱したものを貶める筆法で記しており、この歴史観が幕末の志士たちの思想・行動に

大きく影響したことは周知の通りである。鴨里はその書も学風も山陽を受け継ぐものであり、かつ、幕末にも存命して執筆を続けていたことから、幕末の志士に与えた影響力は無視できない。

頼山陽は一八〇一（享和元）年に歴史書を書く決意を固め、一八〇五年以前に記された叔父春風あての書状にその構想を語っている⁽¹⁵⁾。そして、一八二六（文政九）年に『外史』が完成したものの、それは構想の一部であったため、一八三一（天保二）年、鴨里は山陽より日本外史の補編を著すことを託された（『外史補』序）。一八三四（天保五）年にまず『日本外史補編』と『日本外史補編附録』が出版され、この二書がひな形となり一九年後に『日本外史』一四巻、『名節録』三巻が上梓した（新見貫次・一五—一七）。頼春風宛ての書簡に記された構想段階の『外史』を底本にして、『外史』の章立てにあるものを箱囲いに、鴨里の『外史補』の章立てにあるものを傍線で示すと以下のようなになる。

日本世史 十六氏世家 十三世家 霸史 杜佑通典ノ字 本
朝霸史

源氏世家

平氏世家

北條氏世家

七将世家

皇子護良

楠氏

北畠氏

名和氏

児島氏

菊池氏

河野氏

新田足利氏世家

山名細川氏世家

三好氏世家

長宗我部

伊勢氏世家

小田原北条也

毛利氏世家

吉川

小早川

二氏附

上杉武田氏世家

東諸氏世家

里見氏 佐竹氏

伊達氏

今川氏

朝倉氏

齊藤氏

西諸氏世家

大内氏

尼子氏

大友氏

島津氏

龍造寺氏

織田氏世家

丹羽

柴田

瀧川

池田 諸氏附

豊臣氏世家

加藤

小西

増田

諸氏附（頼山陽記念文化財団・三〇—三二）

文化財団・三〇—三二

構想段階ではなく『外史』に章立てされたものには徳川氏があり、構想にも『外史』にもなく『外史補』のみに章立てされたのは立花（巻七）、浅井（巻八）、朝倉（巻九）、

最上（巻一二）、蒲生（巻一四）である。山陽の当初の雄大な構想に近づけようと鴨里が『外史補』を書き継いだことが見て取れる。

Dにはその他の鴨里の著作、すなわち、幕末の外交秘史である『草莽私記』(No.273-283)⁽¹⁶⁾、鴨里のエッセー・論文などを集めた『鴨里文稿』(No.284-289, 291)以下、『文稿』とその草稿などが含まれる。『文稿』には、頼山陽、篠崎小竹、山陽の高弟である森田節斎、昌平饗の斎藤拙堂（一七九七—一八六五）、塩谷宕陰（一八〇九—一八六七）ら當代きつての儒者による殊批が加えられている。『文稿』の諸論文のうち、同時代人をテーマとした作品に注目すると、第一巻には鴨里が『外史補』を献じた際の「上板倉甘雨公書」(No.238: 1820)、庚午事変の年の一〇月に記した「訥庵記」(No.238: 3335)、第三巻には頼山陽の高弟森田節斎との交友を記した「節斎文鈔序」、徳島藩士であり天誅組に加わろうとして逮捕された伊藤聴秋（一八二〇—一八九五）によせた文「伊藤聴秋詩鈔跋」、稲田植誠（一八四四—一八六五）の墓誌である「國老稲田君墓表」、一八六六（慶應二）年に没した三原町甚大村地頭方村の医師の墓誌「沼田丈庵墓表」（一八二五—一八六六）、「露液翁表伝」、「青木九萬墓表」、西沢町湊の伊藤海の伝「林滄浪翁小伝」、「紀節婦津田氏事」、日露の外交交渉にあたっ

た高田屋嘉兵衛（一七六九—一八二七）の最古層の伝記「高田屋嘉兵衛伝」などが並ぶ。第四巻は鴨里の旅行記二篇により構成されており、「山道遊記」は『外史補』を執筆するために、「西遊雜記」は執筆後に全国を行脚した際の見聞録である。

Eの「明治維新資料」は『草莽私記』の執筆にあたり蒐集した資料と思われ、これも同時代資料である。

Fの「諸儒詩文稿」は漢詩の古典や鴨里と詩友が詠んだ漢詩集である。

Gの「岡田真関係」は未刊行の岡田真の遺稿と行政職にあった際の明治初年の公文書類 (No.485—581) である。

Hの「岡田文平関係」は岡田文平の書簡・論文類であり、明治期の国立大の漢文教員の思考と生活を知る上で基調な資料である。

Iの「岡田秀夫関係」は漢文教員であった岡田秀夫の研究カード・講義ノート類である。

Kの「掛軸及軸物」は、頼山陽の書 (No.801—803)、頼山陽の子頼三樹三郎の書簡 (No.804)、鴨里ならびに真の書などである。

Lの「諸雜物」には岡田家四代に関連した文書類であり、おそらくは秀夫の代にまとめられたと思われる真、文平、秀夫の履歷書は三代のキャリアを知る上で有用であ

る。また、鴨里と秀夫の葬儀記録 (No.765, No.760) は両者の臨終の様や臨終時点での交友関係に関する情報が含まれていて大変に興味深い。この他にも大正時代に鴨里に追贈された位記、鴨里の筆箱 (No.746)、鴨里の写真 (No.756) など鴨里の人物像を具体的に示す品が本分類の下に多数含まれている。

以上が本資料の著者である岡田家四代と資料の大略である。本資料が幕末・維新期の思想・政治の解明に広く裨益すること祈念してやまない。

註

- (1) 生家は兵庫県淡路市王子五七四に現存する。同建物は一九七四年に砂川幸子氏により津名町(現淡路市)に寄贈され、その時家内に残存していた文書・什器類については、親族である羽田功一(志筑市)と砂川癸巳夫両氏が引き取った。一九九五年の阪神淡路大震災の際、羽田氏の所有する文書が洲本市立淡路文化史料館に被災文書第一号として登録されたことを契機に癸巳夫氏所蔵の文書も資料館に入庫し、両資料は一体化されて整理された(洲本市立淡路文化史料館一九九八)。岡田鴨里の生涯については墓誌、並びに「岡田鴨里関連文書」に含まれる鴨里の著書の奥付・序文の日付、「岡田鴨里病死諸控」「岡田鴨里関連文

書」No.765) などに基いて記した。

- (2) 洲本学園所は一七九八(寛政一〇)年に徳島藩主蜂須賀治昭によって創設され、中田謙斎・藤江石亭等などが教鞭をとった(洲本市史編纂委員会・四一八―四二二)。

- (3) 京都大学附属図書館谷村文庫に木戸孝允の蔵書印「長門桂氏圖書之記」の捺された『日本外史補』と『名節録』が所蔵されている。

- (4) 庚午事変は船山馨の小説『お登勢』(一九六九)、吉永小百合主演の日本映画『北の零年』(二〇〇五)年などの題材にもなっている。

- (5) 筆者が遡及しえた最古の戸籍簿には、前戸主「養祖父岡田鴨里」、戸主「養父真相続人岡田文平」、「養母真妻セン、養父真長女アイ、養父真二女イマ、長男文雄、長女ミノル、次男有年、後妻ナカ」が一家として記載されている。家系図に記したアイ、ナカ、文雄、ミノルの没年は岡田文平の墓の裏面記載による。

- (6) 正式な表題は「大正一二年陽一〇月二〇日 午後正二時 命終 雲龍院積學秀善居士 俗名岡田秀夫四十歳 葬式連夜 四十九日百ヶ日貢物諸控帳」(No.760)である。

- (7) 『広島高等師範学校一覽』には「職員」の条に、大正六年一二月二三日版で「講師 漢文 文学士 岡田秀夫」とあり、大正七年一二月一〇日版では「講師」から「教授」

で「正七位」に昇進し、大正九年一月一日版でさらに「従六位」にすすみ、大正一〇年二月一日版では、漢文・漢文主任と肩書きも改まる。大正一一年一月二五日版には、岡田秀雄（ママ）の赴任年は大正五年とあり、No.646の葬儀記録の履歴とはば整合性がとれている。

(8) 洲本市立淡路文化史料館一九九八：No. 364, No. 3724, No. 4025, No. 46-14, No. 5231 文書。

(9) 徳島藩では他の藩より遅れて明治二年六月二四日に版籍奉還が行われた（洲本市史編纂委員会：六四八―六四九）。

(10) メディア史を専門とされる早稲田大学政治経済学術院の土屋礼子教授より、定年直前の石濱鐵郎は一九二二年（大正一一）五月から一九二六（大正一五）年二月までは報知新聞社の総務部の「用度部長」職にあり、一九二七（昭和二）年一月、報知新聞社の総務局会計部にいたことをご教示いただいた。この場を借りて篤く御礼申し上げたい。一方、鐵郎の次男石濱金作が在世中に作成された年譜によると（伊藤整：四四二）、鐵郎は「時事新報社の記者をへて、同社の販売部長となる」と記されているため、前職が時事新報社であったことが分かる。

(11) 大内兵衛は掃守村に隣接する脇田村の出身である。

(12) 讃岐の儒者藤澤東暎（一七九四―一八六四）は一八二四（文政七）年、大阪に漢学塾泊園書院を開き、同塾からは

政財界に多くの人材を輩出した。石濱純太郎の姉カツが東暎の孫黄坡に嫁いだ縁から、泊園書院の蔵書は石濱純太郎により関西大学に寄贈された（太田二〇一五：四九）。

(13) 博物館は一九〇四（明治三七）年に建設された横浜正金銀行本店の建物をそのまま使用している。老朽化した空調の改修工事のため、二〇一六年五月三〇日から二〇一八年四月下旬まで休館となっている。

(14) 岡田鴨里関連資料の閲覧を希望する場合は、神奈川県立歴史博物館に事前に連絡・調整の上で来館してのデータ閲覧となる。データの複写あるいは画像利用については別途許可申請が必要である。

(15) 頼惟勤：四一―四五には『外史』の成立過程が述べられている。頼山陽の春風宛書簡については頼山陽史料館の学芸員花本哲志氏にご教示頂いた。ここに厚く御礼申し上げます。

(16) 一八五三（嘉永六）年のペリー来航から一八六七（慶應二年）年の孝明天皇の崩御までの幕末外交を記したもので、未刊である。一八七四（明治七）年冬一〇月に序文が記されている。

総番号 史料標題	
[A] 岡田鴨里遺稿(蜂須賀関係)	
1-6	蜂須賀家記 卷1—6
7-11	蜂須賀家記 原本 卷1—5
12-14	蜂須賀家記 考異 卷1—3
15	蜂須賀家譜 正院提出本草稿 卷1
16	蜂須賀家譜 正院提出本草稿 卷2
17	蜂須賀家譜 正院提出本草稿 卷3
18	蜂須賀家記(卷之一)草稿
19	蜂須賀家記(福聚公・瑞雲公等)草稿
20	蜂須賀家記(峻徳公等)草稿
21	蜂須賀家記(興源公、等)草稿
22	蜂須賀家記(考異秀月公等)草稿
23	蜂須賀家記(考異福聚公・咸峻公)草稿
24	蜂須賀家記草稿
25	蜂須賀家記草稿
26	蜂須賀家記草稿
27	蜂須賀家記草稿
28	系脈伝記抄
29	系脈考
30	蜂須賀茂頼建白書写(知藩事を廃し知州事とすべし)
31	蜂須賀家記草稿(瑞雲公記、等)
32	蜂須賀家記草稿(峻徳公記・興源公記、等)
33	蜂須賀家記草稿(峻徳公記・興源公記、等)
34	蜂須賀家記草稿(峻徳公記、等)
35	蜂須賀家記草稿(峻徳公記、等)
36	蜂須賀家記草稿(南宗公記、等)

37	蜂須賀家記草稿(南溟公記等)
38	蜂須賀家記草稿(謙光公記等)
39	蜂須賀家記草稿(良遷公記等)
40	蜂須賀家記草稿(良遷公記、等)
41	蜂須賀家記草稿(良遷公記等)
42	蜂須賀家記草稿(峻陵公記等)
43	蜂須賀家記草稿(峻陵公記、等)
44	蜂須賀家記草稿(大龍公記、等)
45	蜂須賀家記草稿(大龍公記、等)
46	蜂須賀家記草稿(大龍公記、等)
47	上書(家記文章用語に対する批評願)
48-53	蜂須賀家記草稿(大龍公記等)
54	蜂須賀茂韶建白書写
55	蜂須賀茂韶建白書写
56	蜂須賀家記草稿(考異正勝)
57	阿波徳島蜂須賀家政家譜稿(「藩翰譜」添付)
58	蜂須賀氏系表稿
59	蜂須賀氏系表稿
60	蜂須賀家記草稿(秀月公記等)
61	蜂須賀家記系譜・附録・目次稿
62	蜂須賀家記系譜・附録・目次稿
63	藩士系図書抜
64	河瀬理右衛門成立書(系図共)
65	系図抜書
66	中内喜又家系附録之抜書
67	蜂須賀茂韶位記写
68	蜂須賀家歴代当主官途覚書
69	蜂須賀藩歴代災害被害高覚書

70	御家中祝儀等指控日の覚書
71	元穆景載四公御墓誌写
72	蜂須賀家記草稿(載公様統)
73	御用諸控
74	正保慶安明暦万治之間ノ雜記
75	年譜草稿(幕末期)
76	年譜草稿(安永期ノ寛政期)
77	長谷川近江建言書写、等
78	蜂須賀家歴代当主事績覚書
79	搜古小録抄
80	蜂須賀家歴代当主事績覚書
81	蜂須賀茂韻事績覚書
82	知藩事罷免に際し蜂須賀茂韻から領民への御告諭写
83	文武学校規則
84	初須加家記草稿補正の必要有無の伺い書
85	御系譜編輯稿本抜書
86	蜂須賀家記草稿
87	拝借御書物御記録類目録など一綴
88	家記編輯関係史料目録
89	蜂須賀家臣儒医等招聘覚書
90	家譜系図草稿改案伺書
91	家譜系図草稿改案伺書
92	家譜草稿の一部
[可]岡田鴨里遺稿(日本外史補関係)	
93-106	日本外史補(版行本) 巻1―14
107-112	日本外史補(原本) 巻1―14
113	日本外史補序稿

114-125	日本外史補引用書目稿
126	多藝録抜き書き
127-136	多藝録 巻1―10
137-142	伊勢国司記略 巻1―6
142	「伊勢国司記略」鈔
143	多々良姓大内家系譜抜き書き
144	末武氏所蔵大内本系
145	「大内義隆記」鈔・薩州旧伝記鈔
146	「大内系譜」鈔
147	大内殿諸事被定置聞書(大内氏壁書)
148	日本外史補草稿
149	日本外史補草稿
150	大内義隆合戦記 上下
151	大内氏壁書写
152-156	吉田物語 一―十二
157	今川系図写
158	「今川記」鈔
159	日本外史補(今川氏)稿
160	日本外史補(長宗我部氏)稿
161	阿府志
162	日本外史補(長宗我部元親稿
163	「土佐国蠹簡集」鈔
164	「土佐物語」鈔
[可]日本外史補関係	
165	島津家譜草稿
166	島津家譜稿(附薩摩兵乱記)
167	「朝鮮記」抄・島津世録記「鈔・熊沢了介事跡考」「九州治乱記」鈔

168	島津家譜草稿
169	「日向記略」抜き書き
170	「九州記」鈔
171	九州古文書抜
172	「勢免天話草」抜書
173	「大友記(上)」抜き書き
174	日本外史補(大友記)草稿
175	日本外史補(大友記・附立花氏)草稿
176	日本外史補(参考大友氏・附立花氏)草稿
177	日本外史補(立花氏)草稿
178	「立斎旧聞記」鈔 上
179	「立斎旧聞記」鈔 下
180	浅井三代記
181	日本外史補(朝倉氏)稿
182	日本外史補(朝倉氏)稿
183	「一垂録」写
184	里見代々記 同九代記
185	日本外史補(里見氏)稿
186	日本外史補(参考里見氏)稿
187	里見軍記
188	「相州兵乱記」抜き書き・「命期集」抜き書き／貞山公伊達政宗行状記
189	毛利氏系図略・里見氏略系図
190	日本外史補(参考伊達氏)稿
191	伊達成実伝略抄
192	日本外史補(伊達氏)稿
193	慶長軍記
194	日本外史補(最上氏)稿
195	「蒲生家記」抜き書き

196	「蒲生盛滅記」抜き書き
197	日本外史補(参考蒲生氏)稿
198	日本外史補(蒲生氏)稿
199	三好長慶伝
200	「浦上浮田両家記」鈔
201	日本外史補(尼子氏)稿
202	上杉輝虎永祿四年注進状の写
203	「上杉家将士列伝」鈔
204	「黒田家譜」鈔
205	「浅川聞書」鈔
206	「佐野軍記」鈔
207	「武徳大成記」抜き書き
208	「武将感状記」抜き書き
209	「備前軍記」鈔
210	「塩尻」抜き書き
211	「朝鮮征伐記」鈔
212	「政談」鈔・「武功実録」鈔・「大内家壁書」鈔
213	勇士武功伝
214	「武事記譚」武徳編年集成」抜き書き
215	武辺咄聞書抄
216	「武家閑談」鈔・「勇士物語」言集」鈔
217	「兵家茶話」抜き書き
218	「落穂集」抜き書き
219	「落穂集」抄
220	「岩淵夜話」抜書
221	丈山碑銘年譜略
222	錦里先生文集
223	「列祖成蹟」抜き書き

224	「烈祖成蹟」鈔
225	「常山記談」抜き書き
226	「元和先鋒録」鈔
227	朝鮮出兵関係資料抜書
228	難波軍記・武家忠信記など抜書
229	「征韓録」抄
230	「会津四家合考」鈔
231	「伝疑小史」「中国治乱記」鈔「幸庵対話」抜書、等
232	「房総軍記」
233	「土佐四国軍記」抜き書き
234	「重編応仁記」鈔
235	「松隣夜話」鈔「奥羽永慶軍記」「寛永小説」鈔
236-238	日本外史補草稿
239	「日向記略」
240	日本外史補（織田信長）草稿
241	日本外史補（福島正則）草稿
242	日本外史補附録参考（山中幸盛他事績稿）
243	真田幸村伝未定稿
244	「菊池伝記」
245	「古今大小名盛衰記」鈔
246	ト斎慶長日記「事脩録」華山野乗鈔
247	「瀛環志異」凡例部分抜き書き
248	「関原正偽」抄
249	「中古日本治乱記」抄
250	草稿「岡本権之丞の事」
251	「統皇朝史略」抜き書き
252	「馬渡新七覚書」抄
253	「温故私記」抜き書き

254	日本外史補（宇喜多氏）草稿
255	「東国太平記」抜書
256	「武徳安民記」抄
257	神戸録
258	「宮本武蔵伝」写
259	「読史余論」抜書
260	「松村万平伝」稿
261	「録其語為佐野氏伝」稿
262	長谷川近江相尋寛
263	草稿（戊辰戦争関係）
264	「論源右大将殺弟義経」稿
265	陸奥宗光田租改正建議之写
266	「明良洪範」抜書 卷一
267	「甲陽軍鑑」抜書
268	大日本史本記賛敷 卷一
269	大日本史列伝賛敷 卷二
[D] 岡田鴨里遺稿並師弟交遊関係者遺稿	
270-272	名節録（版行本） 卷1—3
273-277	草莽私記 序、巻5 原本
278-282	草莽私記 巻1—5 稿本
283	草莽私記（巻一） 草稿本
284-288	鴨里文稿1—5（清書本）
289	鴨里文稿（64編一綴）
290	「五倫の説」稿
291	鴨里文稿（16編一綴）
292	文稿（読外史、文稿、外史補論賛）
293	詩草稿

294	岡田鴨里先生詩稿
295	「高田屋嘉兵衛伝記」稿
296	海防富国強兵作下問に対する存寄書
297	「西遊雜記」稿
298	「西遊雜記」巖流島「條」稿
299	日光遊記
300	「山道遊記」未定稿
301	「延藍樓記」稿
302	「對松軒記」稿
303	「読海国図誌」稿
304	「觀鷺亭記」稿
305	「贈沼田仲思序」稿 他4編
306	「伊藤聴秋詩鈔跋」稿 他6編
307	「読書東乘録後」稿 他6編
308	「周易本義闡觀」抜き書x
309	漢籍拔書
310	山陽先生詩
311	山陽先生文
312	頼山陽先生文稿(乾)
313	頼山陽先生文稿(坤)
314	詠史樂府
315	「三樹先生辛巳記」「三樹先生記」稿「三樹先生乙酉記」
316	枕上集
317	「頼杏坪詩鈔」拔書
318	十旬花月帖
319	頼山陽添削山陽門人詩
320	山陽先生詩拔書
321	岡田鴨里詩稿

322	日本名家文集
323	拙堂月瀨記勝
324	詩集
325	徂徠先生短簡集
326	文章軌範
327-342	唐宋八大家文読1—16
343	四書白文
344	九廻録 全
345	外桜田実記
346	塩谷文稿
347	頼山陽詩稿
348	漢籍拔書
349	「題大和社古銅印」稿
350	日本外史拔書
351	「讀齋記」稿
352	「日本国史記事本末序」稿
353	「四時佳興園十勝小記」稿
354	諸書拔書
355	「楠左衛門尉髻塚碑」文稿
356	先考遺文目錄
357	濃州関原合戦図
[E] 明治維新資料	
358	亥九月薩長土三侯言上之写
359	長州征伐達書写
360	京師風聞書
361	和蘭撰政江ノ御書翰並別副甲比丹工御口諭(写)
362	雜賀重邦說話聞書

363	奉勅始末
364	長州藩と英国軍艦交戦の情報書留
365	安藤信正宛堀織部正上表文写
366	草稿(戊辰戦争関係)
367	元治元年七月の諸情報書留
368	越前藩探索方よりの報告書写
369	第一次東禅寺事件の情報書留
370	大村藩士中尾静馬三条実美卿へ上書写
371	薩英戦争の情報書留・上杉家家老竹俣美作上書写等
372	帮船英夷風説
373	薩長土肥四藩知事へ版籍奉還につき達書写
374	条約締結について幕府より諸大名へ相触の次第写 一橋慶喜等 への蟄居謹慎命令書写し、等
375	条約締結について幕府より諸大名へ相触の次第写 一橋慶喜等 への蟄居謹慎命令書写し、等
376	オランダ国王よりの開国勧告に関する諸情報覚書
377	開港諸条約写
378	久坂玄瑞上表文写
379	長州藩建白書写・長州侯臣下一統へ示す書付写し
380	文久元年家中へ仰付書写
381	ペリー来航直後の国内動向覚書
382	天狗党の乱関係情報覚書
383	双松堂主人建策写
384	亥九月薩長土三侯言上之写
385	水戸藩関係情報覚書
386	開港に関する某建白書写
387	東征にあたり日光山から書付写
388	三兵活法(和蘭イーヘシヒユルケン撰 鈴木自強訳)

389	海国未然論 第一
390	鴉片煙始末(斎藤馨子徳稿)
391	休明光記鈔(羽宇安芸守正養著)
392	国史編輯につき東京府よりの達し写
393	兵制・商税等建言の草稿
394	「論鎖港英仏答書」写し
395	長州戦争下関書翰写
396	姫宮様幕府御興入れの時京都にて御歌写
397	文久三年江戸市中の落書の写
398	幕末諸情報書留
399	南都より申越し書状写(十津川郷士の件)
400	板垣退助建言書写
401	民政改正についての建言書
402	岩野某岡田宛書簡
403	租税徴収の為に治水を完備すべき事の建言
[F] 諸儒詩文稿	
404	東坡詩鈔
405	東坡詩鈔
406	稱謂私言(尾灯二洲著)
407	楽其楽園記
408	曝書亭集鈔
409	詩人玉屑鈔
410	唐宋詩鈔
411	元遺山
412	詩鈔
413	明清詩鈔
414	王漁洋詩話鈔

415	趙欧北詩鈔
416	鶴林玉露抄
417	古詩十九首解
418	楠左衛門尉髣塚碑文写
419	武將贊三十首
420	文稿(備後三郎高德將軍肖像記等)
421	弘道館記述義抄
422	草稿
423	〔松崎懺堂与林樞宇公書簡並跋〕写し
424	南疆釋史鈔
425	三魚堂文集抄
426	劔掃墨談鈔
427	陳龍川文抄
428	名臣言行録抄
429	東華録抄
430	四大奇書評語抄
431	春秋弁義抄
432	明史稿鈔
433	芥子園鈔
434	武功紀盛抄・簷曝雜記抄
435	五雜俎抄
436	武経七書全解鈔
437	瑯邪代醉編鈔
438	通鑑輯覽鈔 一
439	通鑑輯覽鈔 二
440	通鑑輯覽鈔 三
441	左伝抄書
442	二程全書抄

443	甘雨亭叢書抄・新安手簡抄
444	隨園詩話抄
445	尚書抄書
446	読春秋弁義
447	金聖歎批評・水滸伝鈔
448	中国史書拔書
[G] 岡田真関係	
449	先考遺吟 一・二(二冊一綴)
450-453	先考文稿 第一〜四
454	岡田真文鈔
455	課題文稿
456	蕪稿
457	順斎遺稿
458	順斎遺稿叙稿
459	順斎遺稿叙稿
460	林外先生文稿
461	今世所見文
462	〔送岡田順斎帰郷〕稿
463	東湖文鈔序
464	〔続近古史談序〕写し、等
465	成立書・碑銘類書拔
466	明良洪範拔書(大坂城中日記二)
467	書家便覧抜き書き
468	彗星出現につき陰陽師勘文写・戯句写等
469	〔大和社古印記〕写
470	岡田鴨里撰諸墓碑銘稿等一綴
471	諸家文集

472	鶴梁節齋文集
473	諸家所見文
474	文玄先生詩稿
475	土居信義五七絶詩稿
476	湖海餘豪集
477	王陽明立志説
478	稱謂私言
479	通義
480	義烈記事(初篇)写し
481	義烈九士碑銘写し
482	及門遺範写し
483	流水居文稿
484	読史贅議(斉藤馨子徳著)
485	司法省日誌通考
486	司法省日誌通考
487	司法省日誌通考
488	司法省日誌通考
489	司法省日誌通考
490	司法省日誌通考
491	司法省日誌通考
492	司法省日誌通考
493	司法省日誌通考
494	司法省日誌通考
495	司法省日誌通考
496	司法省日誌通考
497	司法省日誌通考
498	司法省日誌通考
499	司法省日誌通考

500	司法省日誌通考
501	林園月令
502	貸し金出入の件につき千葉裁判所より伺と本省指令等
503	区会計掛罷免の上申書
504	戸々日課金を以て救荒を行うべき旨上申書
505	裁判関係備忘録
506	太政官布達(地所質入書人規則)
507	立木(旧姓林)轍之丞履歴書
508	自助社結社大意
509	神社御規則
510	公私諸控
511	公私諸控
512	復籍人府県送帳雛形
513	名東県決議規則
514	太政官・司法省などからの布達覚
515	「大日本史通考」稿
516	名東県学区割方・校数・教員数・予算など書上
517	新聞投書原稿・日清講話に対する所見・民撰議院設立建白書に対する所見など
518	農具等上納令に対する建言書草稿
519	塩田開発に関わる不正経理の訴訟裁断案
520	姦通事件・賭場開帳事件裁断伺及び裁断指示
521	淡路構山宮の官幣社昇格願上申書草稿
522	庶務課長人選に付き建言
523	佐賀県士族蜂起に対し首謀者以外への寛刑建言書下書き
524	区戸長公選之義建言書
525	区戸長公選之義に付再建言書下書き
526	(淡路構山宮)社格御昇進ノ儀建議下書き

527	伊弉諾神社の國幣中社にあることの歎奏写
528	訴答文例
529	書遠思樓詩集後草稿
530	太田駒平書簡写
531	御記録編輯御用に付き癸丑己未御達之件之取調書
532	御廻村に際しての要望書
533	聴訟日誌
534	張儀列伝
535	裁判事例に関する質問及び回答
536	香川県内壬申年租税書き上げ
537	御雇増員伺
538	邏卒経費将来目途
539	区长退職願に対し慰留説諭及び小区合併願
540	第十二大区津名郡区长更迭願
541	僕婢以下税則被仰出に付き納入督促通知書
542	円亀(丸亀)へ仮支庁設置の件
543	淳仁陵・土御門陵修復の建言書案
544	裁判事案に関する伺い
545	裁判事務を府県事務から分離することの建言
546	正朔制度改正の建言案
547	議案(官費民費ノ名義ヲ議ス)など草稿
548	県下巡整使設立の伺書案
549	岡田真履歴書
550	是迄懸り四銘義金消却積(塩田関係)
551	塩田成功之上益金積方
552	塩田縫業人計算方法
553	裁判手続きに付いての上申書
554	裁判事例に関する問合書下書き

555	書簡下書き
556	区长公選とすべき旨建白書下書き
557	牧畜養蚕奨励に義に付き管内への告諭案
558	大内氏壁書写断簡
559	乞食無産ノ徒を減ずる方策の建言下書き
560	私立代言局ヲ議ス
561	「就御尋申上候信州川中島五カ所合戦の次第」写
562	米上納を改正し官費にする願い
563	淳仁陵・土御門陵修復の建言書
564	「官費民費ノ名義ヲ宜ク改租スヘキノ説」下書き
565	官制改正に伴う降級の県に就き建言書下書き
566	境界争いの控訴審判決文案
567	五松堂文集自序
568	親族の代言人資格に関する建議下書き
569	某履歴書
570	改正訴訟入費消却仮規則に関する議案書下書き
571	鉄道敷設促進を促す投書原稿
572	巡邏中捕縛の賊に就いての報告書
573	諸県・裁判所より政府への伺と回答抜き書き
574	貨幣・郵便・郵船などに関する規則覚書
575	区戸長心得
576	貢納石代納にしたき願書
577	禁獄人帰郷の儀に付き歎願書下書き
578	辞職願
579	「新聞発行にあたり一言」
580	司法省地方局並裁判所設置に付き建言書下書き
581	八丈島罪人島役人へ金子貸し付け一件に付き申上候事

[H] 岡田文平関係

582	儀禮図
583	儀禮析義(儀禮講義筆記)
584	令義解官位一覽表
585	根本通明先生「大學」講義筆記
586	左伝拔書(郟戦)
587	左伝拔書(鄆陵戦)
588	左伝拔書(鞍戦)
589	左伝抄書 一・二・一
590	左伝抄書 一・二・一
591	左伝抄書 二
592	左伝書例拔萃
593	重野安繹講義「管子」聴講筆記
594	「老子」講義筆記 上
595	「老子」講義筆記 下
596	内藤先生「中庸」講義筆記
597	中庸
598	「周禮」筆記
599	講易備考
600	三易考
601	易沿革史
602	易沿革史
603	虞氏易義抄
604	書経解義
605	令義解聴講録
606	令義解聴講録 二
607	「假字(かひ)」講義用ノート

608	物集高見講義「假名遣」筆記
609	哲学要領前編抄録
610	書沿革史料
611	劉氏人譜鈔
612	昭代記拔萃(大猷大君記三)
613	頼山陽先生品行論
614	川田薨江先生文稿
615	子産言行録
616	斐山義村先生文
617	咸豐賊匪擾乱記事
618	近藤重蔵始末書
619	韻鏡開廩(卷五・卷六拔書)
620	王安石伝
621	聖武記採要・六合叢談
622	「源定信朝臣(松平定信)心得書」写し
623	「国政根元」写し
624	「軍人勸諭」写
625	遐邇貫珍
626	正名緒言
627	備忘
628	尊語集
629	「賀叔父復五郎嗣古東氏序稿」
630	日誌 第一
631	日誌 第二
632	嘯風亭文稿 第一
633	嘯風亭詩稿 第一
634	稽古日抄々録
635	諺集

636	関白藤原兼実論草稿
637/646	岡田文平文稿
647	やまと文よし野の菜
648	「ことはのしをり かみのまき」稿
649	「ことはのしをり」草稿
650	己巳草稿 清書入り
651	心理一斑睡遊奇説写
652	「假字遣」稿
653	漢詩論
654	富士登山関係資料抜き書き
655	瑞巖竹記未定稿
656	陸軍上等兵菅原欽三郎君碑銘稿
657	李綱伝抄書
658	「送浜田某之大坂序」稿
659	晏子春秋抄録
660	伝習録
661	登浅草富士山記
662	「種菊説」稿
663	「工楽松右衛門略伝」稿
664	「送浜田子之大坂序」稿
665	奥井寒泉先生帰郷に贈る祝辞
666	古学指要抄写
667	「支那の文字」草稿
668	高於菟三詩文稿
669	「送浜田友郎君之大坂序」草稿
670	教育勅語奉読式講話の原稿
671	上林漫橋先生書
672	「記蜜蜂話」草稿

673	「題扁鵲志後」稿
674	世態開進論(フェノロサ演述・井上哲次郎訳)
675	文稿(江戸大震等)
676	文稿(滄浪文社記等)
677	「登富士山記」稿
678	「倫理新説緒言」写
679	筆記疏易要領
680	誦松社開業祝文集
681	辛巳草稿
682	「平重盛論」稿
683	寒泉奥井先生文
684	岡田文平詩文稿
685	書治革史稿 一
686	誦松社設立祝詞原稿
687	「長祿年間江戸城図を見て」文稿
688	「京を去るに臨み林先生に奉る書」稿
689	「京を去るに臨み林先生に奉る書」稿
準690	「送浜田子之大阪序」稿
691	「佐藤尚中氏伝」稿
692	教育勅語奉読式講話の原稿
693	詩文稿(平重盛論等)
694	詩文稿(嘆世俗之奢侈「観梅記」等)
695	文稿(蜂谷半之丞母「平塚因幡伝」等)
696	「膽振国有珠郡移民略記」写し
697	「支那刻書の起源」稿
698	「三条実美公之伝」稿
699	老子白文
700	岡田先生に奉る書

701	「又吉泉記」写し
702	「支那婚姻沿革」稿
703	文法論稿(第十章助動詞及び法諾然拒否)
704	「易論代序」稿
705	「送浜田子之大坂序」稿
706	「紋所並国旗ノ日章」写し
707	「文法論」稿(名詞・副詞、等)
708	「上林漫橋先生に上る書」稿
709	「題写真後」稿
710	伊勢家口伝書写
711	文稿(幕末記事関係)
712	蕪稿
713	「読東萊博義」稿
714	蕪稿(「題韓信胯下図」等)
715	「題亡友人片岡氏写真」稿
716	「題楠母奪刀図」稿
717	詩文稿(「題楠公櫻井駅別子図」等)
718	「謳歌社に□す」
【一】岡田秀夫関係	
719	支那文法詞論
720	Chinesische Grammatik
721	「国字に関する観察」原稿
722	「国字に関する観察」の批評に対する反論覚書(12点一括)
723	岡田秀夫筆記ノート(23点一括)
724	漢籍研究用カード一括(7袋に分割)
725	岡田秀夫辞令・位記(現物未確認)

【二】諸書	
726	備忘録鈔
727	梅園後拾葉
728	南郊文章
729	五代史小論
730	奇談新篇
731	「事実文編目次」写し
732	王陽明「弟に示す志を立るの説」
733	伏見橋上傳
734	邸報雜誌(安政元年12月～同2年3月の情報書留)
735	一本堂葉選続編(温泉の効能)
736	明治三庚午正月 公私諸控
737	舊記(大内氏壁書写)
738	藤田東湖略伝
739	文稿(「送岡田國光婦郷」等)
740	「桑梓景賢録」など一綴
【三】諸雑物	
741	岡田鴨里贈位位記
742	同副書
743	家記編輯功勞に対し蜂須賀家より慰労金・土地下賜目録
744	同伝達書
745	岡田鴨里知人名簿
746	鴨里筆箱
747	日本外史補出版関係諸書類一括
748	御系譜編輯諸調物通
749	御系譜編輯諸費控

750	諸雜用控
751	岡田鴨里贈位奉告祭諸賢祭文祭詞(6点一括)
752	岡田鴨里贈位奉告祭関係書類一括
753	岡田鴨里遺墨・著書展示会目録
754	「岡田鴨里」
755	岡田鴨里略歴
756	岡田鴨里写真
757	「贈正五位古東領左衛門略伝」
758	「偉人藤本鐵石」
759	郷土先覚者顕彰記念品包紙
760	岡田秀夫葬儀諸控帳
761	岡田秀夫略歴書
762	日本外史補出版願書控・金子借用書(2点一括封筒入)
763	岡田真履歴書(4点一括封筒入)
764	岡田文平履歴書2点・奉賀叔父復五郎行古東氏序 2点、計4点一括
765	岡田鴨里病死諸控・同弔辞・弔文、計3点一括
766	兵庫県百年史
767	郷土百人の先覚者
【Ⅱ】追加	
768	淡路稲田騒動檄文
769	岡田真建白書(正朔を改め天時を合すべし)
770	民費課出金出納指示書及び同伴につき伺
771	大里長以下米割り当て書
772	土御門・淳仁帝廟建設建白書
773	借金証文
774	運送会社荷物発送請証

775	岡田真戸籍送り状
776	大池破堤修築に付き褒状
777	某書簡
778	扶持加増の御禮登城の指示書
779	扶持加増の御禮登城の指示書
780	保科正脩書簡
781	自助社よりの書簡
782	伊吹直亮書簡
783	林権縣令書簡
784	岡田真書簡
785	学校資金改革上申の件至急決定を願う旨依頼書
786	岡田真書簡
【K】掛軸及軸物	
787	地券掛増員伺(久保権県令宛)
788	岡田真書簡
789	岡田真書簡
790	刑法・英国憲法等35冊受取証
791	保科正脩書簡
792	長福書簡
793	某書簡
794	島津忠義の幼名に関する質問と返答
795	岡田仙東京にて客死の件に付き覚
796	古東領左衛門小伝
797	林権県令書簡
798	運送会社荷物発送請証
799	裁判関係業務日記
800	某書簡

801	頼襄書	軸
802	頼襄書	軸
803	頼襄書	軸
804	頼三樹三郎手簡	軸
805	岡田鴨里書	軸
806	岡田鴨里書	軸
807	岡田鴨里書	軸
808	岡田鴨里書	軸
809	鴨里孫岡田顯斎書	軸
810	鴨里孫岡田顯斎書	軸
811	山陽先生小切軸	卷物
812	岡田鴨里書	卷物
813	岡田鴨里書	卷物
814	岡田鴨里書	卷物
815	諸家 送鴨里東行書	卷物
816	諸家手簡軸	卷物
817	諸家揮毫送別詩卷	卷物
818	維新世時事項字控	卷物
819	雜	

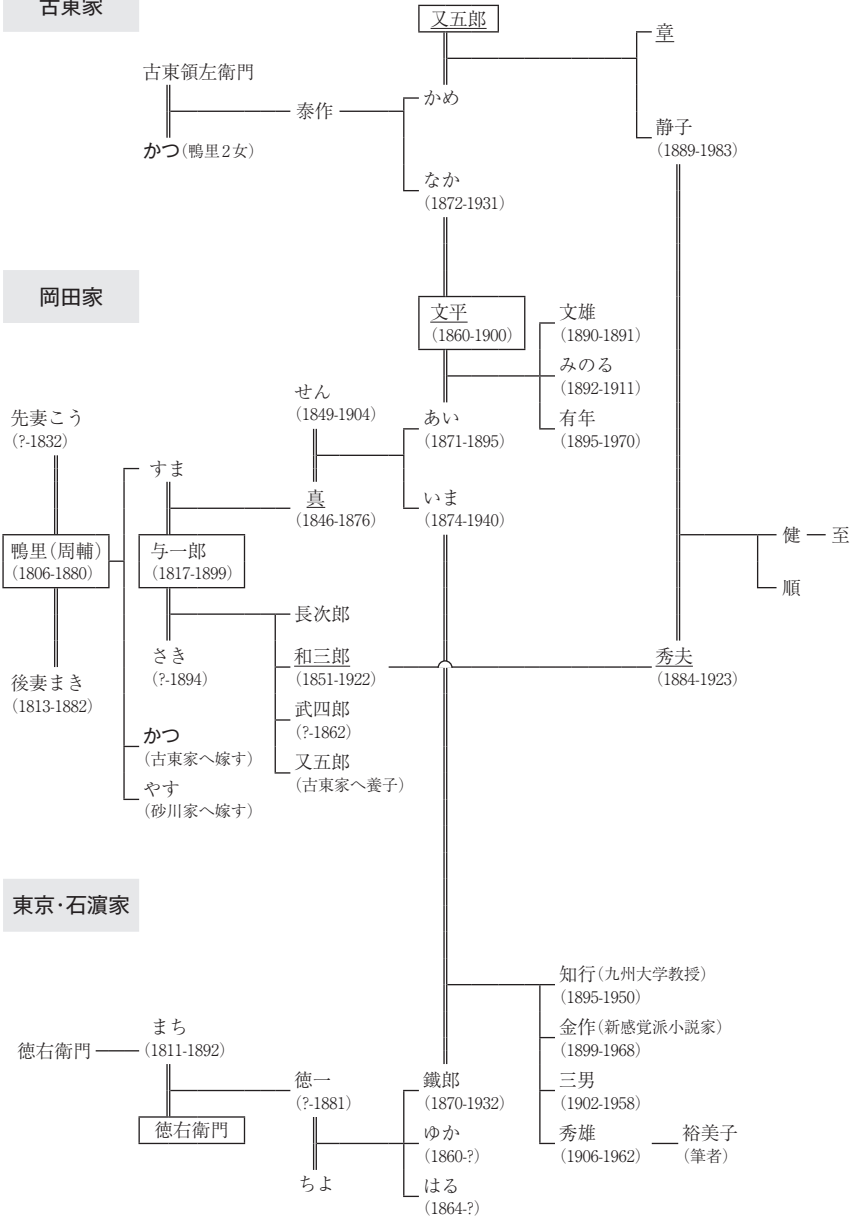
鴨里関連家系図

下線は戸主と確認できた人。□は養子を示す。＝は婚姻関係

古東家

岡田家

東京・石濱家



参考文献

伊藤整・亀井勝一郎・中村光夫・平野謙・山本健吉編 一九六八

『日本現代文學全集九七 新感覺派文學集』講談社

太田剛 二〇一五「石碑・書軸からみる藤澤東暎・南岳の交友

と思想』『泊園』五四・四七―一二六

岡田静子他 一九六八『岡田鴨里 遺稿本類 附孫真、曾孫文

平、曾孫秀夫並二師友 先儒詩文抄 目錄 昭和四三年調

整』謄写版

片山嘉一郎編纂一九二九『御大禮紀念淡路之誇』実業之淡路社

洲本市史編纂委員会（新見貫次）一九七四『洲本市史』洲本市

洲本市立淡路文化史料館一九九八『淡路文化史料館収蔵史料目

録第十五集 津名町旧王子村庄屋砂川文書』

寺崎修一九八〇『徳島慶応義塾と阿波自助社』歴史地名通信

四二（『日本歴史地名大系』付録）

新見貫次一九六六『岡田鴨里』兵庫県教育委員会他

三原郡史編纂委員会一九七九『三原郡史』

頼山陽記念文化財団二〇一〇『頼山陽の生涯』

頼惟勤編一九七二『日本の名著 二八卷 頼山陽日本外史

（抄）』中央公論社

『広島高等師範学校一覽』（大正六年～大正七年版）佐伯便利社

大正六年、（大正七年～大正八年版）佐伯便利社 大正七

年、（大正八年～大正九年版）野田印刷所 大正八年、（大

『史料紹介』神奈川県立歴史博物館蔵「岡田鴨里関連文書」について

正九年～大正十年版）永井印刷部 大正九年、（大正十年
～大正十一年版）多羅尾印刷所 大正一〇年、（大正十一
年～大正十二年版）佐伯便利社 大正一二年